Fate/stay hollow

むり…です

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｈｏｌｌｏｗ

【Ｎコード】
Ｎ１５２３ＢＡ

【作者名】
むり…です

【あらすじ】
Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの再構成。サーヴァントはこの世全ての悪（アンリマユ）。内容は繰り返される聖杯戦争。死んだらまた、やり直し。聖杯の期限が過ぎたらやり直し。この聖杯戦争を終わらせるために衛宮士郎はなんか頑張っていく物語。キャラの性格がもしかしたら違ってるところがあるかもしれない。

この小説は作者のオリ（妄想）設定によって動いています。オリ設

定が嫌な人はこの小説を読まないでください。あと作者の自己満足小説です。批判や誹謗中傷はやめてください。

諸注意　オリ設定（オリキャラは出ません）（前書き）

Ｆａｔｅの自己満足小説です。この小説は作者のオリ（妄想）設定によって動いています。
オリ設定が嫌な人はこの小説を読まないでください。作者の自己満足小説です。
批判や誹謗中傷はやめてください。

諸注意　オリ設定（オリキャラは出ません）

Ｆａｔｅの二次創作は初めてです。型月の小説は難しいときいた。なのでボチボチがんばります。

この小説は作者のオリ（妄想）設定によって動いています。

オリ設定が嫌な人はこの小説を読まないでください。作者の自己満足小説です。
批判や誹謗中傷はやめてください。

マスター　衛宮士郎

サーヴァント　アヴェンジャー

真命：この世全ての悪　アンリ　マユ

宝具：繰り返し『殺されるか、聖杯の期限が切れるかすると一日目に戻る』

：偽り写し示す万象（ヴェルグ・アヴェスター）

：右歯噛咬と左歯噛咬（ザリチェ・タルウィ）

：無限の残骸これは公式の者とはちがくする（アンリミテッド・レイズデッド）

全身の紋様は『この世全ての悪』を現す呪い。それは時代・時間によって変動していくものなので、シンボルたる『アンリマユ』以外の模様は変化する。

アヴェンジャーは最弱なので他のサーヴァントに感知されることはほぼない。

繰り返しについて。結果は残らないが原因は残る。

衛宮士郎との関係。

普通のマスターとサーヴァントの契約と少し違う。アヴェンジャーは衛宮士郎と契約しているが衛宮士郎にとり憑いているかたちにもなっている。

聖杯戦争が始まる前からアヴェンジャー（アンリマユ）はもとから衛宮士郎にとり憑いていたが、だがアヴェンジャーは虚無であるから、まったく衛宮士郎には影響がなかった。

そして、聖杯戦争が始まって、偶々土蔵でアヴェンジャーを召還した。媒介はアンリマユ本人なのでアヴェンジャーが召喚された。アヴェンジャーには姿がないのでマスターである衛宮士郎の姿をかりた。

他のマスター、サーヴァントは原作と同じ。

追記する可能性ある。

プロローグ

カキンキィンンカキンキィンカキンキィン

俺はグラウンドにいた。

音が聞こえてくる。鉄と鉄が重なり合う音だ。
そこで、観察する俺。

赤い男と青い男が人間とは思えないスピードで鉄と鉄みたいなものを打ち込む。

キィイインカキンキィンカキンキィイインカキンキィンカキン
キィイインカキンキィンカキンキィイインカキンキィンカキン

その戦いは目では追えないくらいの早さで行われている。

鉄と鉄が弾ける音

キィイインカキンキィンカキンキィイインカキンキィンカキン
キィイインカキンキィンカキンキィイインカキンキィンカキン

あれは人間ではない。人間はあれほどのスピードで動けるわけがない。

ザッ

その時、青い男の腕の動きが止まった。止まったので手に持っていたものが見えた。紅い槍。

青い男と赤い男が動きを止め。なにやらお互い睨み合っている。

俺には青い男はその紅い槍になにか危険なものを溜め込んでいるようにみえた。

驚き、身動きがとれない感覚が俺を襲う。そのとき、俺は無意識に

わずかに後ずさりをした。

「誰だ――――！」

青い男が叫び、俺は見つかってしまった。

逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろと頭の中でサインをだしている。

ここで死ぬわけにはいかないので走る。

息をきらしながら走る。

あの青い男が見えなくなっと思い廊下に座り込む。

「わりと遠くまで走ったなお前」

「…っ」

「悪いがここで死んでくれや…！」

グサッ

ズドッ

ドサッ

俺の胸にあの紅い槍が刺った。

そして、俺の意識は落ちていく。

……。

目が覚めた。覚めるはずがないと思っていたのだが。誰か助けてくれたのだろうか？

「宝石？」

床に高そうな宝石が落ちていた。

いつまでもここにいても意味がないので帰ることにした。

○

家に着き。畳みにねっころがる。

「……っ！」

今は亡き、切嗣（じいさん）が仕掛けた結界が反応した。

「まさか…あいつが！」

何か武器となる物を！

ポスターが一個。つっ、仕方ない。

「――――同調、開始トレースオン」
「――――構成材質、解明」
「――――構成材質、補強」
「――――全工程（トレース）、完了（オフ）」

バギッ

上から！

「一日に同じ人間を二度殺すことになるとはな」

紅い槍が俺を目掛けて飛んできたが持っていたポスターでそらす。

「……っ」

紅い槍が俺の頬をかする。

「ほぉ、変わった芸風だな坊主！」

ヒュンッ！

槍を打ち込まれ、それをなんとか強化したポスターで軌道をそらす。

廊下に行き、窓の近くによる

ヒュンっ！

青い男が俺を目掛けて槍でつく。つかれた槍を回避しよう後ろによける。

パリンッ！！

後ろは窓ガラスがあったので、窓ガラスを割って外に出ることになった。

「オラッ！」

「……がぁっ」

青い男に蹴り飛ばされる。俺の背後には土蔵。

「詰めだ坊主。もしかしたらお前が七人目だったのかもな」

「…っ」

「じゃあな坊主。今度は迷うなよ」

死ぬ

ここで終わってしまうのか！。

グサッ

俺の胸にあの槍が刺り、刺さると同時に俺の意識は途絶えた。

根源

2月1日

「お前は？」

「あ？お前が呼び出したんだろ」

「サーヴァント。アヴェンジャーだ。あんたが俺のマスターか？」

「マスター？」

「なるほど。お前、何もしらねぇみたいだな」

「聖杯戦争？」

「そうだ七人のマスターとサーヴァントで行う儀式だ」

○

「へぇ、お前、死ぬつもりか？」

「なんでさ、死ぬつもりなんてない。俺はただ、戦いを止めさせるだけだ」

「それを、死ぬっつうんだよ」

○

「ぐあぁあああ！！」

「あーあ、マスターが死んじまったか。やり直しするか。って、俺も死ななきゃいけねぇのか」

○

「なっ！…俺は死んだんじゃ」

「俺の能力だ。俺はマスターが戦うなら止めはしねぇぜ。何回だって生き返らせてやるよ」

○

「ぐぅあああぁぁ！！」

「またか」

○

「■■■■■■■■っ！！」

「……っ」

「無理だろ。てか、あいつ、一人で夜出かけるとか死にに行ってるようなもんだと、いつ気づくのやら」

○

「マスターいい加減、学習しようぜ。俺らには他のサーヴァントは殺せない。だから、マスターを殺せばいいさ。人間であるなら俺は簡単に殺せるぜ。そうだ、次からは俺もついてってやるよ。人間であるならマスターだって殺して見せるぜ」

「それは駄目だ。他の、マスターは殺さない」

「そうかよ」

「…だったら…何度でもやり直してヤルヨ」

1st Day 午前

2月1日

「よぉ、お目覚めかマスター」

「お前は…アヴェンジャー…」

頭が混乱する。……あれ、てか俺、こんなの召喚したっけ？

…目の前には俺の殻を被ったような形をした『この世全ての悪（アンリマユ）』が俺に話しかけながら、パズルをしていた。

あれ？でも俺、こいつのこと知ってる。…多分俺が召喚したのだろう。

「なんだよ、スゲェ具合悪そうだぜ。変なもんでも喰ったか？」

「はぁ？、そんなもの食べるわけないだろ」

しかし、あのうねうね、凄く気になるなぁ。てっ、今はそれところではなく。

「前回、俺どこで殺されたんだっけ？、それとも期限が切れたんだっけ？」

前回、誰に殺されたか覚えていない。たまにあることだ。

「あ？、前回はライダーのあの鎖で殺されたんじゃねぇか。しかし、あれはいてかったなぁ」

そうだ、前回はライダーに殺されたんだ。あの鎖で。

「それよりいいのか、桜って子に先に飯、作られるぜ？」

「今、何時だ？」

「さぁな」

時計を見る。少し早めに起きたようだ。俺は布団をかたづけ、居間にむかう。

「…って、お前、そのうねうね取れよ。藤ねぇと桜が見たら驚くぞ」

「はぃはぃ、とればいいんだろ。あと宝具だっつうの」

桜はまで来ていないようだ。台所に立ち料理をすることにした。

○

数分後、桜が来て、朝食の手伝いをしてくれることになった。

「先輩、では私はこちらを切っておきますね」

「あぁ、桜、じゃあ、そっちはまかせた」

「…こういうのリア充っていんだっけ？」

アヴェンジャーがなにやら、悔しそうに何かボソボソ言ってる。

○

「よし、出来上がり」

ガラァア

どだだだダダダ！！！！

ん、この音は。

「おっはよぉー！おねぇちゃんお腹すいたぞぉー！」

虎の登場である。

「藤ねぇ、…もう少し落ち着いて入ってこられないのかぁ？」

「むぅ、だっておねぇちゃんお腹すいたんだもん」

「ハァ、はいはい。食事はもうできてるから座ってくれ」

毎日、騒々しい虎である。

「あら、アンリ君は？」

藤ねえが唐突にそんなことを聞いてきた。

「アンリ？…あれ？、さっきまではいたんだけど。どこいったんだ

あいつ」

「先輩、アンリ君ならさきほど道場のほうに行きましたよ」

え、道場？

「そっか、じゃあ、俺ちょっとアンリのこと呼んでくる。桜と藤ねえは先に食べててくれ」

アンリを呼びに道場にむかう。

「おぉい、アンリ。朝食が出来たぞ」

「……ブツブツ」

アヴェンジャーはなにやら落ち込んでいるみたいだが。一体どうしたのだろうか。

「おい、アヴェンジャー」

「おぅ、マスターどうした」

こっちにやっと気づいたようだ。

「飯ができたぞ。てか、お前こそこんなところで何してるんだよ？」

「あぁ、それか。なんでだと思う？マスター」

アヴェンジャーなりに何か理由があるのだろうか。しかし、道場ということは……そうか

「修業したくなったとか？」

「んなわけあるかぁっ！！大体いまさらサーヴァント中、最弱な俺が修業したって意味ねェヨ！俺が言ってんのは、お前ら、朝からいちゃいちゃしすぎでってことだっ！」

いちゃいちゃって

「誰がだ？」

「お前だよ！桜って子とお前だよ！。朝からあんな、いちゃいちゃされたんじゃ、いづれんだよっ！こっちの身にもなってみろっ！」

……。

「なんでさ。桜は別にそういんじゃないぞ。そうだ、妹みたいなものだ」

「んなわけねぇだろ！。あれは恋する女だぜ。それもお前に。このリア充やろうっ！。そしてリア充死ね。どうせいつもあの娘のおっぱいばっかりみてんだろ！」

「お、お前は、何、言ってるんだよ。それよか早く飯、喰いにいくぞ」

確かに最近、桜は色々なところが成長している気がする。

「……あぁ、わぁったよ」

道場を出て居間にむかう。

「もぉ、遅いよう。士郎にアンリ君」

「あれ？先に食べていいっていったのに」

てっきり食べているとおもったんだが。

「いえ、作ったのは先輩ですから先に食べるということはできません」

「そうか、じゃあ全員そろったし食うか」

いつものように、四人そろって飯を食う。ちなみに、アンリは俺の生き別れの双子の弟という設定で通している。

○

飯を食い終えたら後は学校に登校だ。

1st Day 午後

午前の授業も終わり昼休みになっていた。飯を食うために昼休みは生徒会室に行く。飯が食い終わった後、友人であり生徒会長である柳洞一成に頼まれてストーブを直していた。一成には、一度生徒会室を出ていってもらった。

「ふむ、いつもすまんな。直りそうか？」

「あぁ…大丈夫だ。ケーブルがいかれてただけみたいだな」

小道具を取り出し、修理を始める。

「いやあ！そうか！さすが頼りになるな！衛宮は」

「大げさだよ一成」

「おっと、昼休みが終わってしまうな」

「じゃあ戻るか」

○

午後の授業が終わり下校時間になる。帰りに商店街に寄り、食材を買って帰る。

「ただいまぁ」

家には多分、アヴェンジャーがいるはずだ。

「おぅ、マスター。思うんだがマスターは弱いよな」

帰ったら突然、自分のサーヴァントに駄目だしされた。

「お、お前だって人のこと言えないだろ」

こいつだって一度も他のサーヴァントに勝ったことがないのだ。

「俺はサーヴァント中、最弱なサーヴァントだからいいんだよ」

アヴェンジャーは毎回何かにつけて、最弱というが。

「それ、言ってて虚しくならないか？」

「なるに決まってんだろ」

あ、へこんだ。

1st Day 夜

「今日も見回りに行くのかマスター？」

アヴェンジャーは不服そうに言う。

「行くにきまってるだろ。誰かが巻き込まれたら大変だろう」

「そう、ま、別にいんだけどさぁ。俺らがその巻き込まれた人を助ける実力なんてないだろ。お前だってわかってんだろ？」

「……くっ！」

確かにそうだ、俺らには実力なんてない。でも、

「誰かが苦しんでいるのを放っておいたままっていうのは嫌なんだよ」

「そうか。さすが、正義の味方様（異常者）だな。」

「それじゃあ、俺、行って来る」

今日は公園に行ってみよう。それで、何もなかったら後は帰ってこよう。

「ちっ……おい、マスター」

「ん、なんだアヴェンジャー？」

アヴェンジャーは気がのらならそうに俺を呼び止めた。

「今回は俺も行く」

「は？お前…まさか他のマスターを殺すつもりじゃないよな？」

ずっと前に『俺が戦いに出るならマスターを殺したほうが早い』なんていってたような気がする。

「マスターがそれを望まねぇならやんねぇよ」

「本当だな？」

「あぁ、本当だ」

なんか急に、そんなことを言われると不気味だな。

「そうか、じゃあ、殺さないってんなら、いいぞ」

「よし、それじゃあ行くか。あぁ後、確かに俺は『人間であるマスターを殺したほうが早いって』と言ったかもしねぇが、実はあれ嘘だったりする」

「は、はぁ？」

こいつ、今更そんなことを。

「いくらマスターといえども…サーヴァントに守られていたんじゃあ仕舞いだ。俺の出る幕なしぃ」

「お前、それ早く言ってくれよ」

もう、少し早く言って欲しかった。

「俺は気まぐれだしな」

○

家を出て、夜の冬木市に出る。

公園の近くを見て回る。

「なぁ…マスター？」

「ん、なんだ？」

アヴェンジャーが、やっぱり駄目だ、みたいな顔で俺を呼ぶ。

「今回の聖杯戦争は全て鍛錬にまわしてみたらどうだ？お前、魔術師なんだろ？」

「鍛錬？鍛錬なら普段からしてるぞ俺？」

「もっとだよ。マスターが弱かったら何度、聖杯戦争を繰り返してもいみねぇだろう？」

鍛錬か。確かに俺に実力なんてない誰かを助ける実力がない。そういった意味では鍛錬をしたほうがいいのだろうか。いや、そもそも、今までずっと魔術の鍛錬をして来たが魔術の腕が伸びたことなんてあまりないんだぞ。本来ならどこかの魔術師の弟子になるのがいいのだろうけど、俺には魔術師の知り合いなんていないし。聖杯戦争中である今現在、他のマスターの魔術師の弟子になるなんてことはできるわけないし。

……しかし、やっぱりそれでも鍛えたほうが良いかもしれない。

「そうだな。わかった今回は全て鍛錬に回す。このままでは、ずっとやられっ放しだし」

「おぉ、それがいい。お前、たいてい四日間で死んでるし、たまには聖杯の期限が過ぎて、また繰り返すのもいいんじゃねぇか？」

そうだな。そういえば、たいてい四日間で死んでいたな。聖杯の期

限は二週間ある。つまり１４日を全て鍛錬に回すことになるのか。

「そうだな。じゃあ、そろそろ帰るか」

見回りも終わったので家に帰ることにした。

2nd Day 午前 午後 夜

2月2日

目覚めた場所は土蔵だった。ただ目の前には桜の顔があった。
そうだあの後、土蔵に入って魔術の鍛錬を始めたんだ。それで確か鍛錬の途中で寝てしまったわけか。

「あぁ、桜。おはよう」

「はい。おはようございます、先輩」

「あぁ、すまん桜もしかして…」

「はい、朝食の準備はできていますよ」

やっぱりか。最近、桜に先を越されるな。唯一の趣味みたいだったものが…。消えていく。……と、今の自分の格好を確認する。鍛錬と言っても、ついでにストーブとかも直していたので服が汚れていた。

「あぁ…この格好で藤ねえの前にでたら、藤ねえのやつ怒るよなぁ」

「はい、そうですね。その格好では藤村先生は怒ってしまいますね」

桜は軽く微笑む。

「……っ」

思わず、その微笑みに照れてしまう。桜は最近、いろんな所が成長してる。胸とか。

服を着替え、居間にむかう。既に藤ねえと桜とアヴェンジャーは席についてた。そして、俺が席についたところで朝食が始まる。

○

朝食を食べ終え。

「先輩、もしかしたら明日から来られなくなる日があるかもしません」

そういえばそうだった。桜は明日から来られなくなる日があるんだ

った。何度かの繰り返しで、これは絶対に決まっていることだと判明した。まぁ、要するに桜にとって絶対にはずせない重要な用があるということだ。

「あぁ、わかった」

「あ、それじゃあ私は朝連に遅れるので、先にいかせてもらいますね」

「気をつけてな」

「はいっ」

○

そろそろ、俺も学校に行こうかな。

「おぅ、マスター死ぬなよ」

「お前は朝から物騒なこというなよ」

アヴェンジャーが登場。ちなみにアヴェンジャーは昼間は家にいる。

「…あと、二、三日後くらか？」

「……あぁ。そうだな」

いきなり話は変わったが。二、三日後というのは、慎二が結界を発

動させる可能性が高い日なのである。それで結構、毎回、俺はライダーに挑んで死んでいたりする。

「今回はわかってるよな？」

アヴェンジャーが意味深に質問をしてくる。

「あぁ、わかってるよ。無謀なことしない。だから、せめて万全な状態で、もう少し実力をつけてから挑もうと思う」

俺はそう言って家をでた。学校に行き。昼は生徒会室で飯を食い。放課後は、少しでも、魔術の鍛錬をしたいので早めに帰ることにした。

家に帰るとアヴェンジャーはパズルをしていた。そういや、いつも思うが、まだそのパズル、クリアできないんだ。そのパズル簡単なんだけど。

夜は鍛錬をした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1523ba/

Fate/stay hollow

2012年1月4日02時51分発行